

---

# あくまでもクリスチャン デーモンシップ

小野 大介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あくまでもクリスチャン デーモンシップ

### 【Nコード】

N4522BA

### 【作者名】

小野 大介

### 【あらすじ】

見習い神父の少年は、クリス魔界の大公爵のいつもの気まぐれで、盗んだクルーザーで大海原に繰り出すことになってしまった。が、ガス欠になり、陸地に帰れなくなってしまふ。動かない船で海上を漂っている、突然の濃霧が発生し、その彼方から古びた帆船が現れた。それは幽霊船だった……。

## プロローグ（前書き）

この小説は、【文芸社】から出版している、

【あくまでもクリスチャン】のサイドストーリーです。  
読み切りの中編小説です。

宣伝のような形になって申し訳ありません。

この小説は数年前に執筆したもので、それから二度にわたり本を出版するなどで時間とやる気を取られたため、添削しておらず、文章や文法など、至らないところが多々あるとは思いますが、その際にはご感想として、

「ここ、おかしいんじゃないか!？」

「もっとちゃんと書けよ!」

「宣伝してんじゃねえよ!」

「本を買いましたあ!」

などなど、ご意見・ご指摘を頂けましたら幸いです。

特に、最後のお言葉が頂けますととても嬉しいです。

……すみません。

ゴホンッ！（咳ばらい）

でっ、では、本編をどうぞ。

## プロローグ

「美しい三日月だね」

マークは、黄金色に染められたシャンパングラスを通し、満天の星空に輝く鋭利な月を眺めていた。

「けれど、キミの美しさには敵わないな」

二つのシャンパングラスが音を鳴らす。

マークの隣には、亜麻色の髪に小麦色な肌をした美しい女性

シンデイの姿があった。手にシャンパングラスを持ち、二人は肩を寄せ合い、夜空を眺めている。

マークの言葉に、シンデイはそのエメラルドの瞳を輝かせている。その輝きは、満天の星空にも、そして、その星空にも負けないほど輝いている三日月よりもずっと美しかった。

漆黒の海、宇宙を連想させる星の海のその下、一隻のクルーザーは、水面に浮かぶ木の葉の如く、ゆらりゆらりと静かに揺れていた。そこは二人だけの空間だった。他にはなにもありはしない。存在するのは、星と月の間接照明と、心地よいばかりの波音のバックミュージック。

そして、濃霧

「!?!」

空も、海も、そして、二人の姿すらも、突然の濃霧が覆い隠してしまった。

急に右も左も分からなくなった二人は不安に陥り、抱き合うような形で、相手の存在を確かめた。その際、シンデイは手にしていたシャンパングラスをつい落としてしまった。

足元で碎けるシャンパングラス。しかし、その存在も音も、突如として忍び寄ってきた濃霧により、かき消されてしまった。

濃霧……。

いまは深夜。そして、この濃い霧の中だ。視界はほぼ皆無な状態

のはずなのに、何故か妙に明るい。

濃霧の中にいるということが、二人には分かっていた。見えて  
いるのだ。本来であれば、真の闇の中だというのに。

気がつけば、お互いの姿もちゃんと見えている。どうも、おか  
しい。

二人がそのように疑問を抱いた、そのときだった。

濃霧の彼方に、二人は巨大な影を見た。影だ。大きな、大きな、  
影。その途端、衝撃が走った。二人は荒々しく椅子から放り出され  
てしまった。

いまのはなんだ！？ 船が何かにぶつかった！？

混乱する二人。

すると、それは聞こえてきた。

音だ。音がする。

ギイ……ギイ…… という、静かな鈍い音。

そう、例えるならば、古い木材がしなるような音……。

「キヤアアアアアアア ツ！」

悲鳴を上げたのはシンディだった。彼女は、目前に聳え立つ巨大  
な影に恐怖したのだ。そして、その恐怖を抑えられなかった。

マークは走り出していた。船首から操舵室へと飛び込み、すぐさ  
まクルーザーをバックさせて、濃霧の中に現れた、その巨大な影か  
ら遠ざかるべく、逃げたのだ。

徐々に遠ざかる巨大な影。そして、遠ざかってゆく不気味な音……。

『ヒイイイイイイ ツ』

どこからともなく、それは聞こえてきた。

悲鳴！？

マークはもしかやと、船首にいるはずのシンディを見やった。しか  
し、彼女はそこにいた。いまの悲鳴は自分ではないと、首を振るこ

とで意思表示している。

「あれは、船……!?!」

シンディは、再び、正面を見据えて、濃霧の中に浮かび上がる影を見つめた。そして、自分に確認するように小さく呟いた。その巨大な影のうすぼんやりとした輪郭を見やり。

クルーザーはエンジン音をふかし、濃霧を突っ切った。そして、ついに抜けた。

満天の星空の下、漆黒の海の上に帰ってきたのだ。

クルーザーのライトが遠ざかる濃霧を照らしていた。そして、遠ざかる巨大な影を。

まるで、意志を持って動いているかのような濃霧を、マークとシンディの二人は、クルーザーの船首にて佇み、途方に暮れるように、ただ見つめるばかりだった。

濃霧は、まさに霧隠れのように、ふっと、水平線の彼方に消えてしまった……。

快晴という言葉に相応しい、真つ青なまでの天空。その下には、空よりもずつと色濃い、青々とした広大な大海原が広がっていた。

ヨーロッパはポルトガルの、とある港。

清潔感や洒落たデザインなど、それらを一括りにして、高級感と呼ぶべきものに溢れた広い桟橋には、いくつもの船が連なって停泊してある。

それらはどれも、値段の張りそうなヨットや、同じく高額であるう、白光りする船体がまぶしいクルーザーばかりだった。使い古された漁船などは一隻も見当たらない。

そう、ここはいわゆる、セレブのためだけの港なのである。

そんな限られた人間のための港の桟橋を、一人の若い男性が歩いていった。

古い映画などの登場するドラキュラが着るような、これまた古い、表が黒に裏が真紅の燕尾服に、襟が広くとがった真つ白なシャツ。その上に、燕尾服と同じく、表が黒一色。裏が真つ赤なマントを羽織ったその男性の姿は、まるで、仮装パーティーの出席者のようだ。そして、また、それらをまとう男性の風貌もまた、その印象に拍車をかけていた。

背中まで伸びた上等な黒髪。その先端や一部には、白銀色のメッシュが施されている。背が高く、足はスラリと長い。スタイル抜群な彼には、いまでは仮装パーティーのときぐらいにしか着ないような古いタイプの燕尾服が、またよく似合い、とても映えて見える。

そして、なによりも彼の顔である。

イタズラ小僧を連想させるような、どこか挑戦的かつ、挑発的な印象を覚えるその血のように赤い瞳をした眼は、切れ長でクール。鼻筋は通りm唇は薄く、色淡く、その両端はにっくと吊り上っており、彼の自信の高さを表しているかのようだ。そして、シャープな顎。

彼は、非常に美しいと呼べる顔立ちをしていた。  
満場一致。賛否両論の賛のみ。そう言っても、決して過言ではない美形である。

彼、個としての存在ならば、十分、この場に適した人物と言えるだろう。しかし、悲しいかな、その独創的なまでの服装が、彼を場違いな人物とさせていた。しかし、本人にはそれを気にしている様子などまるで無かった。人々の視線を受けても毅然とし、我が道をゆく、という言葉がよく似合う様子だった。

「むせかえるような潮風だな。……ふっ、悪くない」

彼は海を前にして立ち止り、大きく深呼吸をした。そして、心地良さそうに笑った。

「あのこじんまりとした、小汚い教会にいて、すっかり身体が鈍ってしまった……！」

腕を伸ばし、大きく身体をも伸ばした。

「小汚いだなんて、ひどいですよお、ルシエルさん……！」

背後で声がした。彼に比べれば音程の高い声。

「真実を述べてなにが悪い」

彼は後ろを振り向かず、誰かに対して喋りかけるように答えた。

「決して、広くはありませんし、とても古いですけど、ボクがちゃんと掃除してますから、汚くはありません！」

また声がした。

「ほう、生意気なことを言うようになったじゃないか！」

彼は、ずっと右肩に乗せたままだった右手を動かし、横へ。ずっと背負っていた大きな荷物を、自分の正面へと移動させた。

それは、一人の少年だった。

「ほう」

猫の子のように襟首を掴まれて、彼の手にぶら下がっている少年。地面に着かない足をぶらぶらとさせている。

自分を掴んでいる男性に睨まれて、怯んでいるその姿は、まるで借りてきた猫のよう。

サラサラ、フワフワとした猫毛な柔らかい髪質をした金髪に、寶石かと見間違えるほど美しい碧眼。ゲルマン民族の特徴を有した、一見、女の子のようにも見える、可愛らしい顔立ちをした少年。童顔なため、正確な年齢が判別しがたいが、その身長から察するに、15、6歳かと思われる。

少年は、キリスト教はプロテスタントの、いわゆる神父がまとうような聖職服を身につけている。男性が掴んでいるのは、その襟首である。

「何か文句でもあるのか？ ああん、クリス」

「……」

男性は、少年を正面に見据えて、その顔を近づけながら睨みつけた。まるで、そこらの輩のようだ。その際、男性は、少年のことをクリスと呼んだ。

クリスと呼ばれた少年は、ぶんぶんとその首を横に振っている。

「ふん、身の程をわきまえろ」

男性は鼻で笑うと、クリスをまた、背負うような形で背中へとまわした。互いの背中を合わせるような形になる。男性の背中では、胸に下げた金色の十字架を涙目になりながら握りしめていた。男性はまた、ぶらぶらと歩き出した。

「さーで、どれにするかなあ」

男性は、棧橋に停泊してあるいくつものクルーザーを、じろじろと、舐めまわすように物色しながら歩いていた。彼の赤い瞳が妖しく輝いている。

「いい天気ですねえ、ルシエルさん」

背中では、クリスは、すっかりさっきまでのことも忘れて、青空を見上げていた。

クリスは、自分を背負っている男性のことをルシエルと呼んだ。

「人の背中にくつろぐな」

「あいたっ」

ルシエルと呼ばれた男性は、その頭を後ろへと傾けて、後頭部で

クリスの頭頂部を軽く小突いた。

「そんなあ、離してくれないのはルシエルさんなのに……」

痛み、手で頭を押さえるクリス。彼はまた、涙目になっている。「おまえを離れたら、後が面倒になるからだ。ふらふら、ふらふらと、どこに行くか分かったもんじゃない」

そういつと、ルシエルはクリスを背負い直した。クリスの身体が上下に揺れる。

また、しばらく歩みを進めた。

ルシエルは、とあるクルーザーの前で不意に立ち止まった。

「ふむ。こいつだな」

大きなクルーザーだ。クリスも、見上げるようにそのクルーザーを見やる。クリスには値段も想像つかない、立派なものだった。

「こいつって、これを購入されるんですか？」

「阿呆。こんなもの、誰が買うか」

そういつと、ルシエルは飛び上がった。

「うひゃあ」

地面を一蹴り。ルシエルは、見上げるほど高い位置にあったクルーザーに、軽々と飛び乗ってしまった。急だったため、クリスは驚いて声を上げた。

「そこで、大人しくしているよ」

ルシエルは、着地したその場所にクリスを捨てた。物のように投げ捨てられたクリス。咄嗟のことで受け身を取るヒマがなく、尻もちを打ってしまった。

ルシエルは、スタスタとその場から立ち去り、船尾にある操舵室へと移動した。

「いたたた……もう、乱暴だなあ」

クリスは、腰を押さえながらゆっくりと立ち上がった。

「大きい船だなあ。……勝手に上がって、大丈夫なのかな？」

クリスがいるのは船首。クリスは、不安そうに縁から目下の棧橋を覗いた。

「こらあ！なにをしている！」

怒号が飛びこんできた。見れば、警備の人間と思われる服装をした人物が、クリスの元を目指して棧橋を走ってくる。

「す、すみません！ル、ルシエルさん……！？」

クリスはびくりとし、慌ててルシエルの姿を探した。

その頃、ルシエルは操舵室の中にいた。彼もまた、その近づいてくる怒号を聞いており、慌てているクリスの姿に、口元を吊り上げていた。意地悪な笑みだ。

ルシエルは手をのばし、船のエンジンを動かすためのキーを差し込むその鍵穴に、手をかざした。すると、鍵穴の中が独りりで動き出し、鍵がまわった。エンジンがかかった。

ルシエルは、操舵室の外に顔を出した。

「船泥棒だ！すぐに水上警察に通報してくれ！」

クルーザーの下では、さきほどの警備員が無線を手に誰かと交信している。

「ど、泥棒！？違います、泥棒なんかじゃなくって！」

クリスは顔を覗かせながら、必死に言い訳をしている。

「泥棒じゃなければなんだというのだ！？」

無線のアンテナのところを指し棒の代わりにして、顔を覗かせているクリスに向けて、警備員は問いかけた。

「えー！？えーっと、ルシエルさんは……ああ、言えないんだ……」

あの、僕は神父」

「神父様が泥棒なんてことをするはずがないだろうが！そんな格好をして、ふざけているのか！？」

「ええ！？」

クリスの発言が警備員を怒らせてしまったようだ。クリスは慌てている。

「なにをやっているんだ、あいつは……」

眉を顰めるルシエル。ルシエルはクリスを　いや、クリスのすぐ近くにある、クルーザーを棧橋に固定するための太い綱を確認し

ていた。始めはクリスに、その綱を外すように命じようと思っていたのだが、どうやら、そんな場合ではないようで、また、そんな太い綱を華奢なクリスがどうこう出来るとも思えず、ルシエルはすぐに諦めた。

一連を見知ったルシエルは、そつと手を伸ばした。その刹那、なにかがルシエルの手の下から飛び出し、それは、クリスの近くにあった太い綱を切断してしまった。

「え？」

クリスは、目の前で突然切れた太い綱に戸惑い、声を漏らした。

「あ、こらあ！」

クリスが綱を切ったものと思い、落ちてくる綱を避けながら、警備員はまた声を荒げる。

スクリューが、音を立ててまわり始めた。クルーザーが勢いよくバツクする。

「うわあ！」

突然、クルーザーが動いたものだから、クリスは横にひっくり返ってしまった。

「逃げたぞ！」

警備員は無線で呼びかける。

クルーザーはバツクのまま、猛スピードで棧橋から遠ざかる。その途中、回転するようにUターンし、今度は猛スピードで走り出した。

波を乗り越え、まるで飛ぶように走るクルーザー。

「ル、ルシエルさん！ はや、はやや、早すぎるんじゃないじゃあ……！？」

上下にひどく揺れるクルーザー。

クリスは立つこともままならず、這うようにして、操舵室にて舵を取るルシエルの元を目指していた。しかし、いくら声をかけても、うるさいくらいエンジンの音と波しぶきに、クリスの声は無残にも掻き消されてしまう。

「クツクツクツ」

そんなクリスの姿に気づいていたルシエルは、なんとも楽しそうに眺めていた。

『 停まりなさい！ 』

けたたましいサイレン音。

後ろを見れば、水上警察のものと思われる船が、同じような速度で走っている。

「ふふっ、うっとうしい蠅のおでました」

ルシエルは、にやにやと笑いながら、さらにアクセルを強める。

船の速度がさらに増した。

「わっ、わっ、わっ！？」

船が波を乗り上げるたびに、大きく上下する。クリスはそのたびに声を上げていた。

『 船を止めなさい！ 停める！ 』

後方から、エンジンの音にも負けない怒号が飛んでくる。水上警察の一人が、拡声器を使って叫んでいる。

水上警察の船が負けずと追ってくる。

「停める、だとお！？ 俺様に命令するか！ ふんっ、身の程を思い知らせてやる！」

そういうと、ルシエルはまたも外に顔を出した。

「クリス！」

ルシエルは大声でクリスを呼んだ。エンジン音にも負けない大声。「！？」

その声に気づいたクリスが顔を上げると

「ちゃんと捕まっていないと、大変なことになるぞ〜！」

ルシエルは、にっと唇の端を吊り上げた。不気味な顔。

「うわわわっ！」

クリスはハツとした。慌てて、手近にあったものに身体ごとしがみついた。

「アッハッハッハッ！ 行くぞ！」

ルシエルは、顔を室内に戻すと共に、掴んでいた操舵輪を一気に回転させ、ブレーキを全開にした。

クルーザーが水面を横に滑る。凄まじいまでの勢いで、クルーザーは大きな円を描いた。

水上警察の船の周囲を高速で一周する。そして、一周を終えようとするその瞬間、彼はアクセルを全開にした。

『うわあ!』

拡声器を通して悲鳴が上がる。

クルーザーは、自身が起こした白波を乗り越えて、大きく跳ね上がり、水上警察の船の上を見事に飛び越えた。

咄嗟に船から海に飛び込む警官二人。その刹那、クルーザーの船底が、水上警察の船の操舵輪の周辺を一撃した。

クルーザーは水上警察の船を飛び越えて、再び、水面に着水した。左右にひどく暴れるクルーザーを、ルシエルは軽快な舵取りで見事に操った。

水上警察の船は操舵室もろとも吹き飛ばされ、派手に横転。見事に転覆してしまった。海に飛び込んだ二人の警官は、身に着けていたライフジャケットの浮力で水面に浮かんでいた。

「ハッハッハッハッ!」

クルーザーは高笑いと共に、水面に浮かぶ警官たちをその場に残し、大海原の彼方へと走り去ってゆく。

その船首

「ひえええええ　っ!」

必死にものにしがみついていたクリスは、恐怖のあまり泣き出していた。腰を抜かしたのか、もはや立ち上がる気力もないようだ。波しぶきを浴びたのだろう。身につけている聖職服もびしょびしょだ。

そんなクリスを他所に、ルシエルは、うねうねと独りで動く黒い触手のようなものに操舵輪を操らせて、一人、操舵室の天井へとよじ登り、強い潮風を全身で堪能していた。黒い触手は彼の影の中

から現れている。

豪快な高笑いと痛々しいまでの悲鳴を乗せたクルーザーはアクセスル全開。猛スピードで、大海原の彼方を目指して走っていた。

ルシエルは悪魔なのである。

「どうだ、クリス。この星の海は！」

満天だ。まさに満天と呼ぶべき星空を見上げて、ルシエルはその両手を天高く伸ばしていた。その手のひらで輝く星を掴まんと。

「きれい、ですね……」

その問いかけに対して、クリスは小さく呟いた。彼もまた、ルシエルと同じく、夜空を見上げていた。どこか遠い目をしながら。

「きれい！？ きれいだと！？ ハッ、そんな言葉では片づけられんよ、この景色は！ いや、この世界は！」

ルシエルは、手を広げたままゆっくりと回転した。

「漆黒の空に輝く、無限の星！ その下に広がる、鏡面のように無限の星を映し出すこの常闇の海原。どうだ、この世界！ まるで、宇宙そのものではないか！？ 我々はいま、宇宙を見ているのだぞ！？」

大きな動きで景色の素晴らしさをよりいっそう表しながら、ルシエルは再び、クリスに問いかけた。

「はあ……」

クリスは、心ここにあらずといった風な返事をした。なんだから、ひどく元気がない。

そんなクリスに対して、ルシエルはムツとした。

「絶景だぞ！？ このような絶景を前にして、おまえはなんとも思わんのか！？」

ルシエルはクリスの胸倉を掴んだ。

「だ、だつてえ……」

クリスは泣きそうな顔だ。

「……だ！もう、分かった！」

ルシエルは強く歯を食いしばり、ぎりぎりと音を鳴らすと、クリスを突き離れた。

「ああ、認めてやる！ 俺たちは遭難した！ これで満足か！？」  
ルシエルは強く地団太を踏んだ。クルーザーがちよつと揺れる。  
「びええええっ！」

クリスは、両手で顔を押しさえて、声を上げて泣き出した。  
「泣くなあっ！」

ルシエルは苛立ち、声を荒げた。しかし、それでクリスが泣きやむはずもなく、どちらかといえばさらに泣かせることになった。  
「くっ」

クリスは大泣きし、ルシエルはそんなクリスをうつとうしく思い、  
ついいは背を向けてしまった。

水上警察の船を、ルシエルの巧みな舵取りによって見事に振り切った彼らは、強奪したクルーザーで、大西洋を西へ西へと、どこまでも突っ切った。クルージングだとして走り続けたクルーザーは、ある瞬間を境に、ぴくりとも動かなくなってしまった。それもそのはず、スクリューを動かすための燃料が尽きてしまったのだから。

「予備の燃料が積んでいなかったのは、盲点だった……」  
いまに至る経緯を思い出して、ルシエルは爪を噛んだ。彼は、自分の失敗を認めようとはせず、言い訳するようにぶつぶつと文句を言っている。

「どうするんですか、ルシエルさん……」  
クリスは涙をぬぐいながら、ルシエルの背中に問いかけた。  
「……いま、考えている」

少し考えて、ルシエルは言った。さも、なにも考えていなかったのを誤魔化すように。

「いつもみたいに空を飛んだり、黒い穴をくぐって、テレポーターションみたいなことは出来ないんですか？」

クリスはまた問いかけた。普通の会話のように思えるが、話している内容はまるでSFである。しかし、それはフィクションでもなければ、妄想でもない。現実である。

「無茶を言つな。そんな遠い距離……俺様が本気を出せば飛べんこ

ともないが……ここがどこかも分からんというのに、適当に飛べるか。海の上だったり、地面の中だったらどうする……！それに、おまえを背中に乗せるなんぞ冗談じゃない。抱えたりしたら、俺が疲れるだろうが……！」

ルシエルはぷいとふてくされたように横を向いてしまった。

「そ、そんなあ……」

また泣きそうな顔をするクリス。

「泣くな！　そして、祈るな！」

ルシエルはまた、クリスに一喝する。その際、クリスが握りしめようとしていた、胸に下げた金色の十字架を取り上げた。鎖で繋がれているため、胸倉を掴むかのような要領でクリスは持ち上げられている。

「悪魔の前で祈るな！　あれは気持ちが悪いんだぞ……！」

ルシエルは悪寒が走ったように身震いしている。

「船を泥棒したから、罰が当たったんですよ……！」

つま先立ちになり、ルシエルの手に掴まりながら、クリスは言った。

「罰だと？　阿呆。祝福こそされ、罰など当たってたまるか」

ルシエルはクリスの手を振り払った。その際、同時に十字架を離れた。

「え？」

よろけながら、クリスは聞き返す。

「こいつを選んだのは、負のオーラがまとわりついていたからだ」

ルシエルは足下を　クルーザーを指差した。

「こいつは、よっぽど多くの人間を悲しませ、ひどい恨みを抱かせた人間が、うす汚れた金で購入したものだろう。そんな奴から奪ったところで、罰など当たらんわ」

ルシエルは鼻で笑った。

「そ、そうなんですか……？」

クリスは確認するように問いかけた。

「そうなんだ！」

念を押すルシエル。

「でも、遭難……」

「……ダジャレか？ やるな」

ルシエルは少し負けた気分がし、クリスのことを認めた。

「あう？」

クリスは分かっているようだ。

「……負のオーラがまとわりついていたら、遭難したとか？」

上目遣いになり、クリスはまた問いかける。

「人間のちんけな負のオーラごときにやられる俺様ではないわ！」

ルシエルはムツとし、否定した。腕を組む。

「否定はしないんですね……」

クリスはそつと目を逸らした。

「う、うるさい！」

「ひう」

手を上げようとするルシエル。クリスは怖がり、びくりとした。

「ふんっ」

ルシエルはその上げた手を振りおろそうとはせず、また腕を組み、素早く踵を返した。常闇の海を眺める。

身を守るような仕草をしていたクリスは、そつと目を開けた。ルシエルが背中を見せているのを知り、ホツとしている。

「船の明かりなど、まったく見えんな……」

ルシエルは、闇の彼方に目を凝らしていた。

「ちよつとでも近くを通ったら、すぐさま乗っ取ってやるのに……！」

ルシエルはまた爪を噛んでいる。少し口元には笑みが見られる。

なんとも悪い顔だ。

「星だけでも明るいんだなあ……海は真っ黒……」

縁から身を乗り出して、クリスは、あらためて景色を眺めていた。ルシエルがいるからなのか、さきほどまでに比べれば、さほど怖が

っている様子は見られない。

「うん……なんか、寒くなってきた……?」

クリスは小さく身震いした。

「あれ?」

クリス是不意に、遠くの海になにかを見つけた。白いもやもやとしたようなもの。

「……? ルシエルさん、あれ、なんでしょう?」

ルシエルの背中に、クリスは問いかける。

「ああん?」

ルシエルは、うつとうしそうな顔をして後ろを振り返った。その途端、視界が真っ白に。その刹那、真っ暗闇に。

「ぶわっ、なんだ!?!」

突然のことに驚くルシエル。

「ル、ルシエルさん!?!」

同じく驚き、悲鳴混じりにルシエルを呼ぶクリス。驚くあまり、ドタバタと走り回っているのが足音で分かる。右往左往しているようだ。

「突然な……ええい、暗いぞ!」

ルシエルは、自分の右手に炎を宿らせた。禍々しい紫の炎だ。その途端、周りがパツと明るくなった。暗闇からクリスが飛び出した。「ぐええっ!?!」

クリスの突進により、腹に思いがけない衝撃を受けたルシエルは、少々醜い声を漏らしてしまった。

明かりが見えたクリスは、きつとルシエルだと察して駆け寄ったのだ。思いの外、彼が近くにいたとも知らず。

「な、内臓を破裂させるつもりか……この馬鹿ものっ!」

片手で腹を押さえながら、もう片方の手でクリスの頭を掴んで遠ざけるルシエル。

「す、すみません! 痛い、痛い、痛い!」

掴まれた頭をぎりぎり締めあげられて、クリスは痛がりながら

しきりに謝っている。ルシエルがクリスの頭を掴んでいるのは右手。そう、紫の炎に包まれた手だ。どうやら、本当の炎ではないようだ。「こんなものでは暗いか……」

炎が宿る手を明かりにし、周囲を見渡してみるも、ろくに見えない。光の先は真つ白な霧か、暗闇のどちらかだった。

ルシエルはクリスの頭の上に左腕を乗せて寄りかかり、一度その炎を消して、手のひらから、まばゆい光を放つ球を生み出した。

「わっ」

強い光だ。クリスはまぶしさのあまり、目が開けられない。その光は濃霧にも負けず、暗闇を照らし出す。

ルシエルは、その光の球の上に放り投げた。

辺り一帯が、昼間のような光の下にさらされた。

「それにしても、なんなんだ、この急な霧は……!？」

ルシエルは周囲を見渡した。光のおかげで、視界はずつとよくなったものの、霧のため、決して良好とはいえない。クリス以外に見えるものといえば、乗っているクルーザーの一部ぐらいなもの。海も空も見えやしない。

「これは、霧なんですか……?」

クリスは、さきほど見えた白いもやもやとしたもののことを思い出し、あれが霧だったのかと納得した。とはいえ、それならば、ものすごい速度で霧に包まれたことになるが、そんな強い風などは吹いてはいなかった。

クリスは自問自答し、首を傾げていた。

「霧でなければなんだというのだ? ……これは、異様な気配を感じるな」

ルシエルは顎に手を添えた。

「異様……ですか?」

「真夜中の海での突然の濃霧か……聞いたことがあるような状況だな」

ルシエルは鼻で笑った。



問いかけるクリス。

「……それは、木材のしなるような音だったと」

ギイ……、ギイ……。

「……」

クリスはついに声を失ってしまった。その顔はもう真っ青。その目には、いまにも溢れ出しそうな大粒の涙が……。

そんなクリスの怖がる様子を見知り、ルシエルはなんだか楽しそうだ。

「どこからともなく聞こえてくる、不気味な音。それは、木材のしなるような音だった。どこから聞こえてくるのか、船員は、ランタンの明かりで周囲を照らして、必死に辺りを見渡した。すると、それは霧の中から現れる。巨大な影が……！」

「ひっ」

クリスが息をのんだ。怖がらせようと不気味な顔を作り、語っていたルシエルは、ふと気づいた。クリスは自分を見ていない。その後ろを見ている。

「……？」

ルシエルは、ゆっくりと後ろを振り返った。

濃霧の中から、それは不意に現れた。

巨大な影

「うおっ!？」

ルシエルもめずらしく驚いた。そんな彼の驚く姿に、クリスの繊細な精神にも、ついに限界が訪れた。

「ぎひいいいい　っ！」

クリスは悲鳴を上げた。

「だあ！　耳元で叫ぶな、馬鹿もの！」

ルシエルはびくりとし、慌ててクリスの口を押さえつけた。

「鼓膜が破れるだろうが……！」

ルシエルの耳は、キーンという音を鳴らしている。

「ふぐう、ふむぐう〜！」

クリスは泣きながらひどく暴れている。恐怖のあまり、すっかり狂乱しているようだ。

「うるさい！」

ルシエルは一喝。

「まったく、おかげで調子が狂ったぞ。せっかく、もう少し怖がらせてやろうと思ったのに」

クリスの口をふさぎながら、ルシエルは再び、後ろを振り返った。濃霧の中に、やはり巨大な影はあった。

黒い影は上下に揺れている。二人が乗っているクルーザー同様、波に漂っているようだ。木材のしなるような音も鳴り続けている。音は、徐々に大きくなっている。

「……船か」

影を見やり、ルシエルは呟いた。

徐々に近づいているのだろう。ぼんやりとした輪郭が、次第に鮮明なものとなる。

「帆船……？」

ルシエルの目には、帆船のシンボルたるマストの十字が見えていた。

「これは、本当に幽霊船かもしれんな……」

ルシエルは苦笑した。

「!?」

ルシエルの幽霊船という言葉に、クリスはますます怖がる。そのとき、視界が揺れた。

衝撃が走った。と同時に、派手な音が。

「うおっ!？」

クルーザーが激しく揺れた。揺れるという表現はその状況を表したもののだが、その上にいたルシエルとクリスにとっては揺れるではなく、飛び上がるだった。

ルシエルは、咄嗟に体勢を立て直そうとするも、クルーザーがゆつくりと、メキメキという音を立てて傾いてゆく。到底、その場に留まることはかなわなかった。

「くっ」  
転覆する。ルシエルは反射的に駆け出した。その手にクリスの頭を抱えて。

傾斜が増してゆくクルーザー。ルシエルは飛ぶように駆け出し、そして、本当に飛んだ。

まもなくして、クルーザーは完全なる転覆を果たし、その上に巨大な影が乗り上げた。クルーザーはそのまま、一瞬にして海中へと引きずり込まれてしまった。

「間一髪だったな……」  
海の藻屑となり、跡形もなく消えてしまったクルーザーを、ルシエルは見届けた。

巨大な影　巨大な帆船の船体部分にルシエルの姿はあった。ルシエルはクルーザーの上から脱すると、咄嗟に、迫りくる帆船に飛び移っていた。ルシエルはいま、ひどく錆びついた鎖に掴まれている。もう片方の手は、いつかのようにクリスの襟首を掴んでいた。

「ひええ……」  
クリスは一部始終を見届けていた。場合によっては、自分もクルーザーと共に海の藻屑となっていたかもしれないと思うと、やはり身体が震えてしまう。

「クリス、幽霊船に乗るが、文句はないな？」  
ルシエルはめずらしく確認を取った。普段ならば有無を言わさないのに。

「は、はいいい……！」  
幽霊船と聞いて、クリスはひどく怖がっている。返事も震えていた。

「クッククック」  
ルシエルはなんとも楽しそうだった。わざと確認したのだろう。

意地悪なものだ。

「よつと」

ルシエルは正面の壁を蹴り、掴んでいる鎖に足をかけた。そして、そのまま、ぴよんと飛び上がる。ルシエルの手がまた何かを掴んだ。それは縁の部分だった。

軽くはないクリスを片手に抱えながら、ルシエルは軽々と船に乗り込んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4522ba/>

---

あくまでもクリスチャン デーモンシップ

2012年1月14日07時20分発行